

『こころのたび』

あこや真珠

5296 文字

～あらすじ～

娘の成人式の日、3年前に行った山口への旅行を、ふと思い出した私。
母のふるさとで、母の思い出と共に、
家族三世代で紡ぐ、イロイロな形のニッポンのキレイ。

今にも雪が降りそうだ。

今日は、どんよりと曇っててとてつもなく寒い。母の家に忍び込んだ隙間風が、ストーブで暖められた部屋を1℃ずついじ悪く下げている。

今日は娘の成人式。

この日を待ちわびた日はなかった。早く大人になれと。何度思ったことか。だけど、涙が出そうだ。もう、私がいなくても、この子は立派に生きてゆける。私の心にも隙間風が、入ってきたようだ。

娘の凜が、三歳の時離婚して、母の所に転がり込んだ。

几帳面でキレイ好きの母が苦手だったけど、行くところなかったわけで。

しかし、今じゃ私が、娘に綺麗にしなさいと毎日怒鳴りながら掃除をしている。血がつながるものなのだ。

「お風呂上がったよー」

凜が風呂場から叫ぶ。

「報告いいから、早くあがりなさい！間に合わなくなるわよ！」

「はーい。わ、すべった!もー、床ツルツルにしすぎだよー。」

凜がぶつくさいいながら、パンツ一丁で出てくる。

母は着物をハンガーにかけて、シミやほつれがないか、念入りにチェックしている。

何しろ 20 年前私が来た着物であって、そんなものもでてくるわけであって。シミ、ほつれ。時って怖い。

しかし、私のおさがりなんて、嫌がるかと思ったのに、案外喜んでくれたので、私も何だか嬉しかった。

「わあ、綺麗～！早く着たい。」

「じゃあ、お母さん着せるのお願いね。」

「凜、ほらこっちおいで。まずこれ着て。」

母が襦袢を、背を向けた凜に着せるところだった。

「あらー。」

母が、残念そうな声を出す。

「あんた、背中ぶつぶつじゃないか。」

「背中ー？」

私と凜が声を合わせて背中を覗きこむ。

凜は、鏡越しにだが、うん、汚いね。

「凜、ちゃんと汗ふいてるの？たく、本当にだらしがないんだから。」
「だらしがないのとは、関係ないでしょ！気になってたけど、そんなひどいかなあ。」
凜は、どうにかして直接見てやろうと、体をグネグネと動かしてみる。こんな、ポーズの彫刻どっかでみたな。

「見て見なさい、バーバの背中を。ほれ。」
母は、おもむろに背中を出したもんだから、二人は目を丸くした。
ついでに、母の背中もコロンと丸まっていた。
私と娘は顔を合わせた。
きっと、あの日の事を思い出したのだろう。

あの日。
あの日も、寒くて雲ってたっけ。

3年前。
小さな空港に、三人降り立った。
寒くて、曇ってて、寒くて。
「お母さん、こっから、電車で美祢まででないと。」
スマホの乗り換え案内を見ながら愕然とする。電車全然ないのね。
けど、お母さんは嬉しそう。
最後に来たのは、誰かのお葬式の時だといっていた。それも、何十年前も前。

ここは、母の故郷の山口。
母は歳もとって、働かなくなると、めっきり生活にはりがなくなった。趣味もなくて毎日ダラダラテレビを見てる。仕事ばかりしてる母も、好きじゃなかったけど、こんな母はもっとやだ。
しかし、テレビで故郷が映ると急に乗り出して見るのだ。
そして、私や凜に故郷の事を独り言のように喋り出す。
「お母さんの家は、浜がすぐそこで、海がきれいで…」

それで、私はいつしか母を故郷に連れてってあげたいと思うようになったのだ。
母に凜を任せて、好き勝手に仕事してた、せめてもの恩返しになるならと。
「私も行きたい！」
「あんた行かないって言ったじゃない。だから、平日にしたのよ。」

「やっぱり行く。バーバの生まれたとこ行ってみたい。それに、お母さんと二人きりなんて、バーバが可哀想だよ。ね、バーバ。」

「ねー。」

小さいときから、私よりバーバという時間が長かったから、私を差し置いて二人は仲良しだ。

そんな訳で、女三人での山口旅行に来たわけなのだ。

宇部空港から、美祢までいくと、これまたバスがない。

覚悟はしてたが、あれを使うしかない。

「どこまで、行きますか？」

「秋芳洞まで、お願いします。」

つくづくペーパードライバーなのを、悔やむ。

しかし、人に運転してもらってというのは、とにかく楽なものだ。

料金メーターを見ながら、その対価を必死に考えた。

秋芳洞へと、続く道は閑散としていた。

真冬の平日の山口のど真ん中。

大きな口がポッカーリとあけて待っていた。

「バーバ見てよ！すごい洞窟！」

「そうそう、中が長いんだから。お父さんときたわ。」

中は真っ暗でぶら下がったり柱になってたり、そして、それらにそれっぽい名前がひとつひとつ、つけられていた。

「あ、これきれい。100枚皿だって。」

私は、それを見て、何故か母が、皿を漂白水につけている光景が目につかんだ。

母は少しの汚れも落としてやろうと、しょっちゅうそんな事してる。

磨きあげた床。白い皿。

なのに、母自身はくたりかけてる。もし、母が、皿や床を綺麗にする時間を自分の身なりを綺麗にするのに費やしていたら、今の母はどうなってたのだろうか。

今日はダンスの奥の着なれない服を来てきている。

化粧もした。何だか少し母の時が戻ったような気がした。

「どうもー。」

母が、通りすぎる人に挨拶をした。

ゆっくり歩いて一時間かかった。

地上に出ると、曇り空だというのに日差しが眩しく感じられた。ちょっとした冒険感を味わい、なかなかの達成感を感じる。そして、この道をまたリターンしなければならない脱力感が。

「秋吉台があるんだよ。すぐだから。緑の絨毯みたいなもの。」

母が、先頭をきって歩くから、驚いた。何か元気になっている。母の背中ではピンと伸びていた。

秋吉台。カルスト大地が奥まで広がっていた。歯みみたいな岩が茶色い土の中から飛び出しているだけの場所。

「あー、何かさ、くる季節間違えたかな、凜。」

もし、春に来てたなら草が映えて青々としてたでしょ。

空だってもっと晴れて青かったかも。

「大丈夫。他の季節にきたなら、今日来て見たものも、また思い出になるでしょ。バーバ、とるよー。」

なんだ、こいつ。そんな事いう子だったか？

凜のスマホには、曇り空と茶色い大地と気取ったポーズの母が、写っていた。

母のお父さんは写真でしか見たことないけど、素晴らしい人だと聞いていた。母は、早くから家を出て、それから疎遠になったみたいだが、お父さんとの亀裂はあるとは思えない。

なぜ、家をでたのか、聞いたことはないけど、それでも母が、この旅で何かを取り戻してくれればいいと、思う。

とにかく、そのあとも、タクシーを使うことになった。

「あーやっぱ移動時間思ったより持ってかれる。」

とにかく、母の地元の長門に向かって、途中よれる所に細々とよるつもりだ。

「お客さん、途中にね、弁天池があつてね。すぐ見れるからよってかない？」

「弁天池ですか？」

「綺麗なんだよ。水の色が違うんだ。折角ここきたなら、寄っていった方がいいよ。」

おもむろに料金メーターを止めると、すぐだからと、少し道をそれた。

そこには、綺麗な青い池がポツンとあつた。

母が、それを見て、綺麗だ綺麗だと目を輝かせている。

それを、ボーッと見ながら、それよりもおじさんが料金メーターをとめて、ここに案内してくれた事になんだか心がうずいた。

そのあと行った金子みすゞ館も素晴らしかった。自分の気に入った詩が書かれたしおりをそれぞれ買った。

『大漁』

『こだまでしょうか』

『わたしと小鳥と鈴と』

鈴と小鳥とそれから私。みんな違ってみんないいんだ。

旅館につくと、もう日は暮れてて、疲れた。

「予約してた、山本です。」

綺麗な女将は、名前を名乗るとすぐ反応してくれた。「はい、山本様。お疲れ様でございます。迷いませんでしたか？」

「ええ、大丈夫でした。」

「そうでございますか。今日はまず先にお風呂に入って頂きまして、それからご飯となっております。大広間のお食事となっておりますので、こちらですね。」

館内地図を見ながら場所を、確認する。

「それで、お客様。今日は東京の方からわざわざお越し頂いて…遠かったでございませよ。」

「ええ、そうですね。」

気のない返事をしながら、地図を見ながら。それでも、女将は話を続ける。

「今日は、離れの広い部屋が空いております、部屋に露天風呂もついておりますので、ゆっくり休んで頂けるでしょうし、そちらの部屋に案内させていただきますね。」

はた、と、顔をあげた。

「あ、ありがとうございます。」

女将はずっと、微笑んでいた。

「本当に遠くから、よく来てくださいました。さ、ご案内いたしますね。」

「わー、すごーいキレイ!見てみて露天風呂!」

部屋につくと、凜がはしゃぎだした。

本当に広くて、綺麗で、私ってば一番安い部屋をとったのに。

「何かさ、この人達って、親切だよなー。」

「皆、優しい人たちばかりだよ。」
母は、ぷかあと、煙草を吸いながら、
「父ちゃんも優しかったよ。」
と、またぷかあとした。
「15で、家を出たけど、その時と全然変わらないよ。」

少しこの旅は地味だと感じていた。
小さな空港から、何も走っていない道路。閑散とした土産屋。茶色の大地。
だけど、鍾乳洞も、池も昔から変わらず神秘的で綺麗。昔の人が歌った詩も、
人の心も。
いいことしてやろうとか、感動させてやろうとか。東京のそういうおしつけがまさがない、
昔から自然と存在するもの。
だから、全部綺麗でなくていい。
そういうものなのだ。きっと。

夜はふぐ料理を堪能すると、何もかも満足して、後はダラダラと過ごした。
私はヒレ酒の回った体を、動かす事が出来ずに、畳で寝た。
そのあと夜中にムクッと起きて、布団に転がり込んだ。
よく覚えてないが、母が、窓際で煙草を吸ってた気がした。

朝。
カチャんと、いう音で起きた。
スマホを見ると、6時。
どうやら、中庭の露天風呂に出るドアの音で起きたようだ。
部屋からは、中庭はまるみえだ。
冬の弱々し日差しが差し込んでいる。今日も曇りだ。

母が、裸で風呂につかるところだった。
背中を向けてるから、母は私が起きた事に気づいてない。

「バーバの背中綺麗。」
ふと、横を見ると凜が、目を開けていた。
「背中？」
「そ。見て。綺麗だよ！」

母の体は、
あちらこちら細くて、長く生きたのが分かる。
爪も筋ばって、変形して硬くなってるのも知ってる。
白髪も隠さなくなったよね。
でも、
人生全部真っ正面から受けたみたいで、背中はずっと綺麗だった。
それで何か、まるで故郷と同じ生き方をしてるようだった。

「ね、お母さん？」
「うん、そうね。ほんと、綺麗ね。」

「本当に綺麗だわ、凜。」
母が、最後まで裾をたくったり、襟を直したりしながら、何だか母も嬉しそうだ。
勿論、私もこんな綺麗な凜を見れるなんて、この日を無事むかえられて…

「えー、やだお母さん泣くのやめてよー。」
「あんた、凜が嫁にいく訳じゃないんだから、いちいちこんなことで泣くんじゃないよ！」
「自分のわかいころを思い出したのよ。」
「えー、やだ！いずれはお母さんみたいになるなんて泣きそうだよ！」
「いーから、行くんだよ。ほらほら。裾よごすんじゃないよ！」
「凜行ってらっしゃい。気を付けてね！」
「はい。行ってきまーす。」

凜が成人式に向かうと、母は掃除をすと言いだした。
「バタバタしたら、何か埃っぽくなったわ。凜が滑るように、床ピッカピカにしとかないと。」
「あはは、それいーね。」
古い家だけど、母が、綺麗にいつも磨くから、古さの中に新しさがある。
今や、何でも綺麗にする優れものが世の中に溢れているが、結局は綺麗にしたいという人の心がないと、そんなものは何も役にたたない。
で、そういうものが溢れているということは、そういう人がたくさんいるってことで、うちらもその中の二人と言うことだ。ちゃっかり自分も入ってます。

「ねえ、お母さん。三年前山口行ったじゃん？」
「ああ、もう三年もたってるのか。そうだ、美代子さんに久々に電話しようかしら！」
「そういえば、暑中見舞い貰ったときに電話したきりだよ。でも、美代子さんに会えて良かったよね。またこうやって連絡するようになったし。」
「本当に元気でいてくれたから安心したよ。」

美代子さんは、母の小学校の時の親友だった人。
疎遠になってからも、母は美代子さんの連絡先だけはずっと、大切にしていた。

旅行の二日目は母の故郷の長門で、美代子さんと会う予定しかいれなかった。
美代子さんはずっと、長門にいて結婚して子を産み、孫を可愛がって幸せに過ごしていた。

駅の待合室のストーブを囲って二人は、手を取りながらずっとずっと話していた。

母を故郷に連れていったのは、自分のためだった。

自分は、親切で優しいんだと証明したかったんだ。それで、自分のやってきた事を正当化したかった。

だから、あの池のように。ただ自然に溢れ出てきた綺麗な水のような、そんな人の優しさを受けるのが後ろめたかった。

それでも、母と美代子さんが話すのを見て、自分のためでも母をつれてこれて良かったと思った。

「お互いヨボヨボだけど、また会いたいわ。」

「ヨボヨボって、お母さんには自慢の背中があるでしょ。」

「そうね、まだいけるわ。さあ、さあ、働くよ。」

母が、手でお湯をすくって肩にかけると、朝日がそれに反射して艶っぽく背中が輝いた。

そうすると、母はゆっくりと、体を沈ませて、ふうと、笑顔をこぼした。

〈了〉